

曲目の紹介

◆「入間川」

いるまがわ
(大名狂言)

大名 山本則秀
太郎冠者 若松隆
入間の某 山本則重

訴訟の件で長い間、都へ留めおかれた大名ですが、ようやく、願いが叶い、太郎冠者を伴って意気揚々、東国の国元に帰ります。すべて望み通りになった上、新たな領地まで拝領した嬉しさに天下を取ったような気分の大名家、武蔵の国まで来ると大きな川に出ますが、どうしても川の名前が思い出せません。そこで川向こうの人に尋ねますが、横柄な物言いをしたため、同様に言い返されてしまいます。怒った大名は太刀を抜きかけますが、太郎冠者になだめられて丁寧に問い直します。川の名を「入間川」と教えてもらった大名は心の中で「人間の逆さ言葉」を使った返返しをする機会を伺います。

◆「神鳴」

かみなり
(鬼山伏狂言)

神鳴 山本則孝
藪医者 山本泰太郎

都には名医が多くなり、患者が来なくなってしまう藪医者、東国には医者が少ないと聞いて都落ちを決めた。旅の途中、

広い野へ出たあたりで突然空模様が怪しくなり、雷鳴が轟く。先を急ぐ医者の前に落ちてきたのは神鳴であった。腰を強く打って動けなくなった神鳴は、医者を脅して治療をするよう命じる。懸命の治療の甲斐あって、神鳴の具合はすっかり良くなった。そのまま立ち去ろうとする神鳴を呼び止め、藪医者は……

◆「末広」

すえひろ
(脇狂言)

果報者 山本東次郎
太郎冠者 山本凜太郎
すっぱ 山本則孝

果報者は太郎冠者に末広(扇)を買って来いと言いつけます。ところが末広を知らない太郎冠者、都のすっぱの口車に乗って、傘を売りつけられてしまいます。果報者は太郎冠者の失態に怒り、屋敷を追い出してしまいます。太郎冠者は果報者の機嫌を直そうと、すっぱに教わった囃子物を思い出し……

◆狂言のお話

山本東次郎

日本芸術院会員・人間国宝・文化功労者

演者の紹介



山本東次郎 やまもと とうじろう 昭和十二年生

狂言方大藏流・山本東次郎家四世。三世東次郎の長男。山本会を主宰。平成四年度芸術選奨文部大臣賞受賞。平成十年紫綬褒章受賞。平成十三年エクスンモービル音楽賞受賞。平成十九年日本芸術院賞受賞。重要無形文化財総合指定。令和四年七月人間国宝認定。令和四年文化功労者。著書「狂言のすすめ」「狂言のことだま」(どちらも玉川大学出版部)。「狂言 山本東次郎」(共著 新人物往來社。東京都杉並区在住)。



山本泰太郎 やまもと やすたろう 昭和四十六年生

山本則直の長男。父および東次郎に師事。昭和五十二年「朝猿」の子猿で初舞台。平成二年「三番三」、平成八年「釣狐」を披く。平成二十二年度文化庁芸術祭優秀賞受賞。平成二十三年日本伝統文化振興財団賞受賞。令和四年「枕物狂」を披く。若手能楽師と「三聲会」を開き研鑽の場としている。重要無形文化財総合指定。狭山市立南小学校出身。



山本則孝 やまもと のりたか 昭和四十八年生

山本則直の次男。父および東次郎に師事。昭和五十三年「伊呂波」で初舞台。平成八年「三番三」、平成十五年「釣狐」を披く。若手能楽師と「三聲会」を開き研鑽の場としている。重要無形文化財総合指定。狭山市立南小学校出身。狭山市在住。



山本則重 やまもと のりしげ 昭和五十二年生

山本則俊の長男。父および東次郎に師事。昭和五十七年「伊呂波」で初舞台。平成十二年「三番三」、平成十六年「釣狐」を披く。若手能楽師と「七拾七年会」を開き研鑽の場としている。重要無形文化財総合指定。



山本則秀 やまもと のりひで 昭和五十四年生

山本則俊の次男。父および東次郎に師事。昭和六十年「伊呂波」で初舞台。平成十四年「三番三」、平成十八年「釣狐」を披く。重要無形文化財総合指定。



山本凜太郎 やまもと りんたろう 平成五年生

山本泰太郎の長男。父および東次郎に師事。平成九年「伊呂波」で初舞台。平成二十八年「花子」を披く。令和四年「花子」を披く。狭山市立柏原小・中学校出身。



若松隆 わかまつ たかし 昭和三十四年生

東次郎に師事。平成二十八年「三番三」を披く。

狂言講演会 (主催 狂言入間川を観る会・共催 中央公民館)

狭山市の若手狂言師 山本泰太郎、則孝、凜太郎による事前学習会 (狂言ワークショップ)

毎年好評を戴いております
狂言講演会、
今回は狭山市市民会館
小ホールで開催いたします!

日時 令和7年2月5日(水)
14時～15時30分 開場13時30分～
会場 狭山市市民会館 小ホール
定員 300人 入場無料
問合せ先 中央公民館 04-2952-2230

申し込み等の詳細については、広報さやま12月号または、12月10日以降、中央公民館のホームページをご覧ください。